

親子相互作用中の親の注視行動が乳児の語彙獲得に及ぼす影響 —親の自閉特性の個人差から—

三川 明日香

【序論と目的】

自閉スペクトラム症(ASD)は、社会相互作用やコミュニケーションの異常を特徴とし、個人の自閉特性は社会的注視に影響を与えることが先行研究で示されている。例えば ASD 者の注視行動は定型発達者とは異なり、相互作用相手や顔などの社会的刺激を避け、非社会的刺激を好むことが明らかになっている(e.g., Gale et al., 2019)。また、ASD の症状には軽度なものから重度なものまで多種多様に存在するが、これらの症状の連続性は、ASD 集団と同様に一般集団にも存在するとされており(Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin, & Clubley, 2001)，一般集団でも個人の自閉特性によって、通常とは異なる社会的注視がみられる(e.g., Chen & Yoon, 2011)。このような一般集団における個人の自閉特性は、親子相互作用場面にも影響を与えるのだろうか。

言葉を学習する乳児は、親が発したラベルとそれに対応する物体や出来事の対応関係を学習する必要がある。発達心理学においては、親子相互作用中のイベントが、親が発したラベルとそれに対応する物体・出来事を、乳児が結びつける機会となることが明らかにされてきた(e.g., Baldwin, 1993)。乳児のラベルと物体・出来事の対応関係の学習を助ける、親子相互作用中の親子コミュニケーションイベントとして、乳児の物体把持や視線コミュニケーション(joint attention・shared attention)の研究が蓄積されている。しかし、これら各種コミュニケーションイベントの生起割合が、親の自閉特性によってどのように変化するか調べた研究はない。さらに、Parr et al.(2015)の研究から、親の自閉特性が乳児の長期的な言語発達に影響を与えることは明らかになっているが、乳児の即時的な語彙獲得に影響を与えるかは明らかになっていない。そこで本研究では、親の自閉特性が親子相互作用中の親の注視行動や親子コミュニケーション、乳児の即時的な語彙獲得に影響を与えるかを検討することを目的とし、親子相互作用中のラベル発話付近での親の注視行動や親子コミュニケーションイベントを計測・分析した。

【方法】

研究参加者として、生後 17 ヶ月—35 ヶ月の乳児とその親 37 組が参加した。本調査は、親の自閉特性を測定する質問紙調査と親子相互作用・乳児の即時的な語彙獲得を調査する実験室での調査で構成された。実験室での調査は「親子相互作用」と「ラベル学習テスト」の2つのフェーズからなった。質問紙調査については、AQ 日本語版自閉症スペクトラム指數(若林, 2016)を用いた。「親子相互作用」では、親にウェアラブル型のアイトラッカーを装着し、ラベル発話場面での、乳児の顔と親が発したラベルに対応するおもちゃへの親の視線を計測した。親子相互作用終了後に実施される「ラベル学習テスト」では、モニター型のアイトラッカーを用いて、ラベルを音声提示した後に画面上に提示される、ラベルに対応するおもちゃへの乳児の注視行動を測定し、親子相互作用中に親が発したラベルを乳児が学習しているか調べた。

本研究では、親子コミュニケーションイベントとして joint attention(一方が相手の顔とおもちゃを相互に注視し、他方がおもちゃのみを注視)、shared attention(親子が共に相手の顔とおもちゃを相互に注視)、親のラベル発話中の乳児の物体把持を定義した。joint attention については、相手の顔とおもちゃを注視する行為主体が、親の場合と乳児の場合があった。

【結果の予測】

本研究では、親の自閉特性が高くなるにつれて、乳児の顔への注視が減少し、親が発したラベルに対応するおもちゃへの注視は、乳児の顔への注視と異なった視線パターンになると予測した。乳児の顔への注視と同様に、親子相互作用中の親主体の joint attention と shared attention の生起割合は減少すると予測した。一方で、乳児主体の joint attention と乳児の物体把持については、親の自閉特性に伴う変動パターンが親主体の joint attention と shared attention とは異なると予測した。さらに、親の自閉特性に伴って乳児の即時的な語彙獲得の成績は低くなると予測した。

【結果】

親の自閉特性と親の注視行動を一般化線形混合モデルで解析した結果、AQ 得点(親の自閉特性)の主効果のみが有意であり、親の自閉特性が高くなるにつれて、親が親子相互作用中に乳児の顔を見る割合も、親がラベルを発したおもちゃを見る割合も減少した($\chi^2(1)=7.24, p=0.007$)。また、同様の解析を実施した結果、全ての親子コミュニケーションは親の自閉特性とは関連しなかった。さらに、乳児の即時的な語彙獲得を一般化線形モデルで解析した結果、親の自閉特性とは関連しなかった。探索的分析で、そもそも親子コミュニケーションイベントが乳児の即時的な語彙獲得に影響を与えるかを一般化線形混合モデルで解析したが、いずれの親子コミュニケーションイベントも乳児の即時的な語彙獲得とは関連しなかった。

【考察】

本研究では、親の自閉特性は親子相互作用中の親の注視行動に影響を与え、乳児の顔と親がラベルを発したおもちゃへの注視が減少するという結果を得られた。しかし、親子コミュニケーションイベントの生起割合や乳児の即時的な語彙獲得については、親の自閉特性との関連は確認できなかった。

親の自閉特性に伴って乳児の顔(社会的刺激)への注視行動が減少するという本研究の結果は、先行研究と一致した(Noris et al., 2012)。一方で、親がラベルを発したおもちゃ(非社会的刺激)への注視行動が減少するという本研究の結果は、先行研究(e.g., Gale et al, 2019)と一致するものではなかった。本研究の結果は、親の自閉特性が親子相互作用において、社会的刺激だけでなく非社会的刺激を含めた、親の注視行動全般に影響を与えていることを示しているのかもしれない。

全ての親子コミュニケーションイベントの生起割合と親の自閉特性が関連しなかった原因の 1 つに、乳児の個人差の影響が考えられる。乳児の行動によって各種コミュニケーションイベントの生起にはばらつきが生じる。本研究では、乳児の個人差が大きかったために親子コミュニケーションイベントの生起割合と親の自閉特性に関連がなかったのかもしれない。

乳児の即時的な語彙獲得が親の自閉特性と関連しなかったという結果は、先行研究(Parr et al., 2015)とは異なっていた。しかし、本研究では、乳児の即時的な語彙獲得について調査したため、先行研究の結果(Parr et al., 2015)と一致しなかったのかもしれない。Munro, Baker, McGregor, Docking, & Arciuli(2012)は、乳児が言葉を学習するために、乳児が意味のある文脈の中で何度も単語に触れることが必要であると述べている。いずれの親子コミュニケーションイベントも乳児の即時的な語彙獲得には関連がなかったという、本研究の探索的分析の結果は、即時的な乳児の語彙獲得に今回の親子相互作用の時間や機会が十分でなかったことを表しているのかもしれない。

一方で本研究では、親の自閉特性が親子相互作用中の親の注視行動に影響を与える可能性があることを示した。親の注視行動の違いが積み重なることで、乳児の長期的な言語発達に影響を与える可能性がある。今後は、親の個人内特性だけでなく、乳児の個人内特性も考慮し、乳児の言語発達に影響を与える親子コミュニケーションイベントについて更なる研究をしていくことが望まれる。(比較発達心理学)